

Close-up Interview (2月号 表紙の顔)

# 川添 奨太

KAWAZOE SHOTA

## 現在・過去・未来

昨年11月のJPBAプレイヤーズドリームマッチ2021で通算20勝に到達、永久シードの仲間入りを果たした川添奨太。デビューから12年で6度の3冠獲得など、圧倒的な成績で駆け抜けてきた。今現在の立ち位置をどう見つけ、これから先どこへ向かおうとしているのだろうか…。



### 1年目から大ブレイク

ボウリングとの出会いは小学3年生のとき、そのスコアが164だったというから、天賦の才があったのだろう。

「小学生のころはサッカーをやっている、大会の打ち上げでみんなで行ったのが初体験でした。父親に自慢話をしたら、じゃあ一緒に行こうと連れて行ってもらった。ところが今度はまったくうまくいかなかった。でも逆に、自分の思いどおりにいかないのが面白くてはまっていきました。またチームスポーツのサッカーよりも、個人スポーツのボウリングの方が、自分には向いていたと思います」

もともとプロ志望ではあったが、ナショナルチームに選ばれて国際大会を経験するうちに、大学卒業までは日本代表として頑張る決意でいた。しかし思いがけず転機がやってくる。

「大学2年のちょうどクリスマスの日でした、父親が脳動脈瘤で倒れて、命にどうこうという状況ではなかったけど、これまでどおりに仕事を続けていくのが難しくなった。ボウリングはお金がかかるし、ナショナルチームで海外遠征をするにしても、自己負担の部分が大きい。思い悩んだけど、年が明けて1月末にはプロへの挑戦を決意して、JBCへの退会届を提出しました」

2008年のジャパンオープンのベストアマ(総合3位)の権利で1次テストが免除され、2次の実技テストは文句なしのトップ合格で、49期のライセンスを取得した。

デビューからの活躍はご存じのとおり、すさまじいものだった。6月のラウンドワンカップで3位に入ると、9月のMKチャリティカップ、10月の新人戦をともに2位で初タイトルは逃したが、続くジャパンオープンが優勝決定戦、再優勝決定戦をともにパーフェクトで初タイトルを獲得、優勝賞金

に加え副賞の1千万円を獲得してみせた。その勢いのまま臨んだ最終戦の全日本選手権も制して、デビューイヤーでポイント、賞金、アベレージの3冠を独占してしまう。

「プロになってすぐに結果が出るとは思ってなかった。ましてやジャパンオープンの優勝決定戦でパーフェクトを出せるとは…。2008年のジャパンオープンで自分が3位に入ったときに、山本勲プロが優勝決定戦でパーフェクトを出して優勝するのを目の前で見ていて、自分もいつかこんなことができたらいいなと思ったけど、それが1年目に現実になって夢のようでした」



▲2019年の全日本で19勝目を挙げた。この時点では20勝もさりとて通過するはずだったが、年明けのコロナ禍に始まって思いがけず苦難の道りとなった

### 感じたことのない重圧

翌2011年は5勝、さらに2012年も2勝を挙げ、3年連続3冠獲得と向かうところ敵なしの感があったが、本人は自信満々とは裏腹の感覚に襲われていた。

「今振り返ると、怖いもの知

らずで投げていたなとは思いますが。テレビ決勝は、初優勝のジャパンオープンから負け知らずでした。しかし3年目ですかね、逆に負けるのが怖くなってきた。ストレスなのかアドレナリンが出すぎちゃうのかわからないけど、薬を飲まないで眠れなくなっていた。今も試合になると、その症状が出ますね」

4年目からタイトルの獲得ペースこそ落ちたが、進化への必要な過程だった。

「投球精度には自信があったけど、いろんなレーンコンディションに合わせる対応能力に課題を感じていました。だから5年目のシーズンは、優勝とかではなく、全試合予選通過を目標に掲げました。実際にその目標を達成できたし、対応能力、アジャスト能力を磨かせてくれたという意味でも、自分のボウリング人生の分岐点になりました」

2019年の全日本選手権で6度目の優勝を飾り、永久シードの20勝へ王手をかけた。しかし次の1勝までほぼ丸2年を要した。

「これまでの人生でいちばんプレッシャーを感じた期間でした。全日本で優勝したあと、2020年の年明け早々コロナウイルス禍で10カ月間ぐらい試合が開いた。そして再開後第1戦のドリストカップと、続くAPAカップでうまく結果を残せなかった。これまでも2試合続けて悪いことなんていっぱいあったけど、20勝達成への注目度が高いせいもあって、『調子が悪いんじゃないの?』とか、すごく言われた。その時期所属先を移籍して、早く結果を出したいというプレッシャーも重なって、それらがどんどんストレスになっていった。メンタルコントロールができていませんでした」

そんな苦しみから解放されたのは、自らが会長を務める選手会が企画したJPBAプレイヤーズドリームマッチだった。その戦いも、2回戦、3回戦と

いずれもワンショットプレーオフの末に勝ち上がるなど、薄氷の勝利だった。

「マッチプレーが好きなので自分に向いた競技フォーマットだったし、追い込まれてからが強いと思っています。最近では追いついていくので、すごく自分の良さが出た試合でした。最近では追いつまれるようなシチュエーションまでもいけていなかったです」

### ゴールなんて永久にない

日本ではデビューからの3年連続を含む6度の3冠に輝くなど、圧倒的な成績を残してきたが、同時に2017年にはアメリカに居を構えて本格参戦するなど、PBA挑戦にも重きを置いてきた。

「2011年ごろにもスポット参戦しているけど、その当時はまだ憧れみたいな感覚でした。でもジャパンカップで戦ったりしているうちに、ここで互角に戦えるボウリングをしていきたいと強く思うようになった。とくにナショナルチーム時代に競い合っていたオーストラリアのサム・コーリーやマレーシアのラフィック・イスマイルなどが先にタイトルを獲得しているのがすごく刺激になっている。そして日本の環境がぬるま湯とは言わないけど、厳しい環境に身を置くことで、もっとも成長できると思います」

昨年からはナショナルチームに在籍したままプロ入りが可能になるなど、プロとアマの垣根が低くなりつつあるが、チャンスがあれば、もう一度日本代表として世界選手権やアジア競技大会でも戦ってみたいと語る。

「あくまでも私見ですけど、例えば3パターンのオイルコンディションで行われている全日本選手権が、翌年の世界選手権の代表選考を兼ねますよ

川添 奨太V20への道程		
優勝	年度	タイトル名
1	2010年	第34回ABSジャパンオープン
2	2010年	第44回全日本選手権大会
3	2011年	第6回MKチャリティカップ
4	2011年	GRANDBOWL CUP 2011男子新人戦
5	2011年	コカ・コーラカップ 2011千葉オープン
6	2011年	第35回ABSジャパンオープン
7	2011年	第45回全日本選手権大会
8	2012年	ROUND1 CUP 2012
9	2012年	第46回全日本選手権大会
10	2014年	第2回グリコセブンティーンアイス杯
11	2014年	ROUND1 CUP 2014
12	2014年	コカ・コーラカップ 2014千葉オープン
13	2014年	第48回全日本選手権大会
14	2016年	中日杯2016東海オープン
15	2017年	第12回MKチャリティカップ
16	2017年	第51回全日本選手権大会
17	2018年	中日杯2018東海オープン
18	2019年	第7回グリコセブンティーンアイス杯
19	2019年	第53回全日本選手権大会
20	2021年	JPBAプレイヤーズドリームマッチ2021

となれば、メディアの注目度も全然違ってくと思います」

20勝という数字は通過点、その余韻に浸っている気持ちはさらさらしないようだ。

「今シーズンで言えば、国内では7度目の3冠を目指したいし、コロナ次第ですが、できれば春にはアメリカにも遠征したい。この3年ほどでボールの威力はかなり上がったと思うので、今のボウリングがPBAでどれくらい通用するか楽しみです。現役でいる限りおそらくゴールってないんだと思います。今自分が目標としているところにたどり着いたら、またさらに上を目指すだろうと思います。またボウラーとしてだけでなく、ボウリング界に恩返しをしたいという気持ちも強い。自分なりの貢献策も考えたいですね」

取材協力: 東名ボール



かわぞえ・しょうた / 1989年1月4日生まれ、福岡県出身。右投げ、血液型B。2010年プロ入り(49期・ライセンスNo.1219)。優勝20回。3冠6度獲得。東名ボール所属。